

## 迷子たちの樂園 —‘The Little Girl Lost’

### ‘The Little Girl Found’ 試論—

佐藤 光

1794年に印刷された詩集 *Songs of Innocence and of Experience* の扉には、副題として“Shewing the Two Contrary States of the Human Soul”<sup>1)</sup>と記されている。後年、彼が預言詩と呼ばれる作品を次々と著し、互いに対立しあう登場人物たちの葛藤と結合に象徴的意味を託したことを考えるならば、“Contrary”という概念がブレイクの思想の根幹をなしているといっても過言ではない。初期の作品の一つである *The Marriage of Heaven and Hell* の中で、ブレイクは“Contrary”について次のように述べている。

Without Contraries is no progression. Attraction and Repulsion, Reason and Energy, Love and Hate, are necessary to Human existence.

*Songs of Innocence and of Experience* に付与された副題は、その4年前に書かれた引用の命題と共鳴し、詩集全体の解釈の方向性を明確に指示している。すなわち、“Innocence”と“Experience”は対をなす一組みの概念として用いられているということ、したがって、われわれがこの詩集を読むとき、“Innocence”と“Experience”との間に価値の上下を想定してはならないということである。詩集に描かれているのは、墮落=罪ということばで表されるような、価値判断をともなった魂の時間的な推移ではない。二つの相反する状態の相互作用の中で、人間の魂が絶え間ない“progression”を遂げていく諸相がうたわれているのである。

本論では、このような視点から ‘The Little Girl Lost’ ‘The Little Girl Found’<sup>2)</sup> を読み直し、それを “a return to Innocence”<sup>3)</sup> と解釈することの是非を検討しながら、“Innocence” と “Experience” との動的な関係からうみだされる “progression” が、そのどちらにも還元できない新しい状態であることをあきらかにしたい。

## I

‘The Little Girl Lost’ ‘The Little Girl Found’ は、その冒頭にあるように、預言的能力をもった語り手によって語られる未来のヴィジョン (“vision”) である。

In futurity  
I prophetic see,  
That the earth from sleep,  
(Grave the sentence deep)

Shall arise and seek  
For her maker meek:  
And the desert wild  
Become a garden mild.  
(‘The Little Girl Lost’, 1-8)

ヴィジョンとは、鋭敏な感受性と豊かな想像力を有するものが仮構する可能性としてのもう一つの現実像であり、その基底にあるものは、フィクションを対置することによって目前に横たわる現実の必然性をいったん無化し、一見動かしがたく見える現実のありようを再点検してみようという批判への意志である。そういった意味で、この詩の語り手は *Songs of Experience* の ‘Introduction’ や ‘The Voice of the Ancient Bard’ にうたわれているような、過去、現在、未来を見渡すことのできる預言者であり、吟遊詩人であ

るといってよい。7行目の“the desart wild”は、様々な問題と不幸を抱える現実の様態を比喩的に表したものであるが、それがいつの日か“a garden mild”に変容するのを予見する彼のことばには、現状に対する過激なまでの懐疑と挑戦が秘められており、それはまた、変革を待望する声でもある。<sup>4)</sup>

語り手の想像力が繰り広げる少女 Lyca とその両親にまつわるヴィジョンは、文字と絵画という同一平面上の二つの媒体を通して読者の眼前に提示される。

In the southern clime,  
Where the summers prime,  
Never fades away;  
Lovely Lyca lay.

Seven summers old  
Lovely Lyca told.  
She had wanderd long,  
Hearing wild birds song.  
(‘The Little Girl Lost’, 9-16)

両親のもとを去り、野の鳥の歌を聞きながら孤独な旅を続けて、疲労困憊しているはずの Lyca だが、文字テキストをみても絵画テキストをみても不安の影はまったくない。彼女はようやくにして、厳しい寒さや苛酷な風雨とは無縁の常夏の南の国、すなわち、物理的にも精神的にも、何ものをも恐れる必要のない楽園(“a garden mild”)にたどりついたのである。Lyca の年齢に7があてられているのも、それが完成を象徴する数字だからだ。<sup>5)</sup> 四つの季節のうち、「夏」をもって一年を代表させている(“Seven summers old”)ところにも、楽園にあってけっしてかげることのない落ち着きと平安を得た Lyca の魂の状態をうかがうことができる。

こうして Lyca は、アダムとイヴがエデンの園を去ったときに失った、

万物が自律的に共存する場としての「自然」との有機的な関係を回復する。語り手はその様子を、旧約聖書に描かれた楽園のイメージを換骨奪胎しながら語っている。<sup>6)</sup>

The kingly lion stood  
And the virgin view'd,  
Then he gambold round  
O'er the hallowd ground;

Leopards, tygers play,  
Round her as she lay;  
While the lion old,  
Bow'd his mane of gold.

And her bosom lick,  
And upon her neck,  
From his eyes of flame,  
Ruby tears there came;

While the lioness,  
Loos'd her slender dress,  
And naked they convey'd  
To caves the sleeping maid.

(‘The Little Girl Lost’, 37-52)

Lyca はもはや、人間だけがもっている個人名 (“Lyca”) を失い、彼女の本質に関わる語 (“virgin” “maid”) で呼ばれることになる。それは、名付けるという特権的な行為をとおしてアダムが行った、人間はすべての生き物の司であるという自己規定<sup>7)</sup> を、彼女が放棄したことを意味する。ブレイクはいつている、「生きとし生けるものはすべて神聖である」 (“For every thing that lives is Holy”)<sup>8)</sup> と。楽園にあっては性質や能力の差異はあっても差別はない。身体的、精神的な力の強弱はあっても、それによる支配も

なければ抑圧もない。恣意的な規範と価値観をふりかざし、それにそぐわないものを悉く「悪」とみなして断罪する恐るべき審判者としての「神」もない。そこには嫉妬も中傷も悪意も狡智も存在しない。すべてのものはそれぞれに固有の天分と技量を発揮しながら共存している。獅子が流す“Ruby tears”と、第3プレートに描かれた獣たちの柔和な表情が、それを如実に物語っている。獅子や虎の間であって安らかに眠っている Lyca は、アダムがまとった人為の衣(“dress”)を脱ぎ捨てて万物との融和を果したのである。<sup>9)</sup>

7歳の Lyca が、「若い未婚の女性」という語義をもつ“virgin” “maid”で代置されているところに奇異を感じるむきがあるかもしれないが、われわれが読みとるべきものは語意よりもむしろ、これらの語に内在している「清浄」「純潔」といった含意である。Lyca が獣たちを前にして平気で眠ることができるのは、野獣は獐猛であるという「通念」に対して「処女性」をもっているからなのである。

ここでさらに注意しなければならないのは、7という数字に引きずられて、Lyca を幼い少女と読んではならないということだ。それは Lyca を大人として解釈せよということではない。語り手が語っているのはヴィジョンである。そこにリアリズムの物差しを持ち込んで議論するのは持ち込む側がまちがっている。第2プレートに描かれた横たわる Lyca は、あきらかに成年に達した女性であるが、文字テキストと絵画テキストのこの矛盾こそが、それがヴィジョンであることを端的に示している。大人であると同時に子どもでもあるLycaは、日常的な「通念」による説明を拒絶しており、いわば、ある観念を具現化するために語り手の恣意によって呼び出された記号的存在なのである。

したがって、楽園に到達したLycaが両親に対して示している、7歳の子どもにしては不自然なほどの気づかひも、ここでは全く不自然ではない。

Sweet sleep come to me

Underneath this tree;  
Do father, mother weep.—  
Where can Lyca sleep.

Lost in desart wild  
Is your little child,  
How can Lyca sleep,  
If her mother weep.

If her heart does ake,  
Then let Lyca wake;  
If my mother sleep,  
Lyca shall not weep.

Frowning frowning night,  
O'er this desart bright,  
Let thy moon arise,  
While I close my eyes.

(‘The Little Girl Lost’, 17-32)

ここに顕著にみられるのは、Lyca の卓抜した想像力である。他人の視点から物事をみるという、安易に語られるわりには実行するのがむずかしい行為を、Lyca はやすやすとやりおおせている。なかでも、自分にとっての安住の地 (“desart bright”) が両親には恐るべき “desart wild” に見えるにちがないという認識は、不安を一方的に Lyca に投射するだけの彼女の両親とは対照的に、Lyca が透徹した想像力を備えていることを示している。

両親が彼女の後を追って荒野にやってきていることを知りぬいている Lyca は、彼らへの配慮を、月の出を願う「夜」への祈りの形にして表現する。彼女が月を呼び出すのは、両親が道に迷わないよう、その前途を照らすためなのである。(なぜ彼女が、両親のもとへ戻ることを一顧だにしないのかについてはあとで触れる。)

このように、類いまれな想像力を有し、獣たちに象徴されるような、異なる形貌、異なる資質、異なる行動様式をもつものとの信頼関係を、いともたやすく築くことのできる Lyca の魂の状態を、われわれはどのように理解するべきだろうか。Songs of Innocence の ‘The Chimney Sweeper’ や ‘Holy Thursday’ に描かれている「大人」の指図に従順で素直な子ども、あるいは、‘The Little Boy Lost’ ‘The Little Boy Found’ において、保護者となる「父親」を求めてやまない依存心の強い子どもと同じ次元で扱うには、Lyca はあまりにも強靱で自立した精神力の持主である。だが、Songs of Experience の ‘The Chimney Sweeper’ や ‘The Little Vagabond’ に登場する子どものように、既存の制度のゆがみを弾劾するだけの辛辣さと激しさをもちあわせているかといえば、けっしてそういうわけではない。むしろ、Lyca のことばや行いから感じられるのは、諸事に悩み苦しんだのちに平安に達した人のみがもつやさしさと思いやりである。ちょうど、虐げられた民族の一人として生まれ、支配者からの迫害を受けながらも、弱者に慰めを与えることをやめなかったナザレのイエスのことばがそうであるように。

Lyca は “Innocence” でもなければ “Experience” でもなく、そのような二項対立を鳥瞰する位相にあると考えるべきだ。それはまさに、“Innocence” と “Experience” という “Contrary” な二者によって鍛練され、“progression” を遂げた魂の姿である。図式的になる危険をおそれずに、神への絶対服従と思考停止を代価に、安楽な生活を保証されていたところのアダムとイヴを “Innocence” とし、そのような生活を失って死の恐怖と未来への不安にさいなまれるかわりに、支配と管理から解放され、「仕組まれた自由」ではなく「ほんものの自由」を手にしたアダムとイヴを “Experience” とするならば、「罪のゆるし」を契機とする地上の楽園を建設することによって、両者を矛盾させあうことなく統合しようとしたイエスに、われわれは Lyca の先達をみることが出来る。彼女が積極的に「迷子」になり、親もとへ帰る努力をせず、逆に親をいざなう工夫をする理由はここにある。Lyca は、不安につつまれていて “desart wild” しか映らない両親の「知覚の扉」 (“the

doors of perception”<sup>10)</sup>) を洗い清め、彼らを “desart bright” へ導こうとしているのであり、いいかえるならば、彼女は、“Innocence” と “Experience” のはざまで呻吟している魂に、二律背反を肯定し、両者を往還する自由を得たときに開示される楽園への道のりを、自らの身をもって示しているのである。

## II

Lyca の後を歩みつつある両親の様子は、‘The Little Girl Found’において詳しく語られている。

All the night in woe,  
Lyca’s parents go:  
Over vallies deep,  
While the desarts weep.

Tired and woe-begone,  
Hoarse with making moan:  
Arm in arm seven days,  
They trac’d the desart ways.

Seven nights they sleep,  
Among shadows deep:  
And dream they see their child  
Starv’d in desart wild.

Pale thro’ pathless ways  
The fancied image strays,  
Famish’d, weeping, weak  
With hollow piteous shriek  
(‘The Little Girl Found’, 1-16)



‘The Little Girl Lost’ の結びの12行に引き続いて同じ一枚のプレートの上  
に印刷された ‘The Little Girl Found’ の最初の14行は、物理的な連続性  
によって内容の断絶が強調される、つまり、獣たちに囲まれて眠っている  
Lyca の静謐と調和に満ちた光景との対比によって、彼女の両親の陰鬱で荒  
涼とした魂の状態が浮き彫りにされる仕掛けになっている。1行目の “All  
the night in woe” や9行目の “Seven nights they sleep” を、Lyca がい  
る “In the southern clime” や彼女の年齢を提喩法で表現した “Seven  
summers old” とあわせて読むならば、さらにまた、両親の旅路を叙述す  
る一連の語 (“woe” “vallies deep” “Tired” “woe-begone” “moan”) が  
総体的につくりあげている陰影に注意を向けるならば、不安におびえる彼女  
の両親と平和な眠りにつく Lyca との間に、重大な意識の断層が存在して  
いることはおのずと明らかである。ではいったい、何が Lyca の両親を、  
これほどまでに暗澹たる状況に追い込んでいるのだろうか。

9行目の “Seven nights they sleep” から以下8行に、Lyca の身の上を  
心配する両親の姿が描かれているが、注目すべきは使用されている語の一貫  
性である。12行目の “desart wild” が、Lyca の眼を通して見た “desart  
bright” に対応していることはいうまでもないが、“shadows deep”  
“dream” “fancied image” などが暗示しているのは、思い煩う心が不安を  
呼び、その不安がさらに不安を生むという実体のない悪循環にはまりこんで  
しまった、彼らの思考の不健康な状態である。ありもしないものを空想して  
思い悩むことはそれを存在させることになる。青ざめた様相で (“Pale”)、  
道なき道 (“pathless ways”) をさまよっている (“strays”) のは、彼らの  
とりとめのない幻想 (“fancied image”) だけではなく、Lyca の幸せな境  
遇を想像できず、自閉的妄想におびえている彼ら自身の姿でもある。彼らが  
彷徨している「夜」とは、自らの否定的な思考に胚胎した内的な闇であると  
いってよい。そこからぬけだすには、対象を認識する姿勢と思考の形態その  
ものを変革する以外にないのである。

自分で自分の革命をおこすことは極めてむずかしいが、Lyca の両親には

幸運な外圧が加えられる。行く手を阻む一頭の獅子を前にして恐怖のあまり地面に伏したとき、彼らが目にしたものは、襲いかかる牙でもなければ、咆哮する猛獣の姿でもなかった。

They look upon his eyes  
Fill'd with deep surprise:  
And wondering behold,  
A spirit arm'd in gold.

On his head a crown  
On his shoulders down,  
Flow'd his golden hair.  
Gone was all their care.

(‘The Little Girl Found’, 33-40)

獐猛だと思い込んでいた獅子がまったく危害を加えてこないという事態は、彼らにとって驚愕に値する精神的な事件であった。それは、彼らが自明なものとして無批判に受け入れていた「通念」の妥当性を根底から揺さぶるとともに、「...というものは」ではじまる一般論の性質上不可避免的な傲慢さを、彼らの目の前に突きつけたのである。このような、帰納推理の陥穽ともいえるべき、一事をもって万事を律しようとする姿勢についてブレイクは、“To Generalize is to be an Idiot To Particularize is the Alone Distinction of Merit — General Knowledges are those Knowledges that Idiots possess”<sup>11)</sup> といっている。一般論とは、個体の個性を無視して、恣意的な枠組を強引に対象に適用して分類してしまう暴力的な行為でしかない。柔和な獅子は、Lyca の両親が押し付けてきた「知識」による判断をもの見事に打ち砕き、「通念」でくもっていた彼らの「知覚の扉」を開いた。既成の「知識」の下僕になっていた彼らは、今やその主人となるべきことを知り、不安を克服して、Lyca のいる楽園へ向かうのである。

Then they followed,  
Where the vision led:  
And saw their sleeping child,  
Among tygers wild.

To this day they dwell  
In a lonely dell  
Nor fear the wolvis howl,  
Nor the lions growl.

(‘The Little Girl Found’, 45-52)

詩の冒頭で語り手が預言した “a garden mild” の到来は、第3 プレートの  
絵画テキストをみるかぎりでは成就したように思えるが、文字テキストによ  
ると、Lyca とその両親がたどりついたのは “a lonely dell” であって、“a  
garden mild” ではない。幸せと喜びに満ちて終わるはずの詩の結末を、大  
方の読者の期待を裏切ってまで、あえて孤独と憂鬱の影が漂う語で締めくく  
った背景には、語り手の（あるいはブレイクのといってしまうてもいいかもし  
れないが）悲愴なまでに冷徹な自己認識がひそんでいる。姿形の異なるもの  
が互いの資質や才能を尊重しあって生きることが理想的なものとして語ると  
き、あるいはそのような生活信条をもって日々の暮らしを営もうとするとき、  
万人が勝者たらんと鎬を削りあう競争社会からは放逐され、個人を組織の一  
員として管理しようとする権力機構からは疎外され、あるいは、粛清される  
だろう<sup>12)</sup> ということ、語り手はその卓見をもって見抜いていたのである。  
絵画テキストにおいては共存共栄の楽園を描きながら、文字テキストでは  
“a lonely dell” を選択した語り手は、否応なく自分が巻き込まれてしまう  
共同体の論理に、自分の主義主張が衝突するときに生じる齟齬や背馳や挫折  
を、二種類のテキストを互いに撞着させることによって巧みに表現したとい  
えよう。楽園に到達した Lyca とその両親は、そこに到達してしまったが  
ために、孤独な生活を送らざるを得ないのである。<sup>13)</sup>

### III

‘The Little Girl Lost’ ‘The Little Girl Found’ は “a return to Innocence” を描いた詩ではない。Lyca とその両親がたどりついた楽園は、アダムとイヴが暮らしていた楽園とは似て非なるものである。その違いは、彼らが “Innocence” と “Experience” の両者を経験したことに由来しており、それこそが “Contrary” な二者がつくり出す “progression” なのだ。“Innocence” と “Experience” のどちらかにとらわれて自滅するのではなく、それらをともに対象化したとき、彼らの目の前には新しい楽園が開けた。ただしそれは、現実世界＝共同体からは隔絶された楽園であった。詩全体を統一している規則正しい couplet は、彼らが “a garden mild” へ向けて前進していく足音であると同時に、共同体からはじき出されて “a lonely dell” へ追いやられていく一歩一歩を暗示しているのである。

Lyca は “Innocence” と “Experience” という二つの状態をまったく矛盾させあうことなく、一つの掌のなかで縄のようにないあげていった。語り手は、楽園のヴィジョンで詩を完結させずに、それが現実世界と抵触したときに発するであろう摩擦にまで想像力をめぐらせた。“Innocence” と “Experience”、絵画テキストと文字テキスト、ヴィジョンと現実、それらが交錯して生まれる “progression” が、この詩に奥行きのある面白さを与えている。

### 註

- 1) ブレイクのテキストは *The Poetry and Prose of William Blake*, ed. David V. Erdman (New York: Doubleday, 1970) を使用した。頁数はこの版による。絵画テキストは *William Blake: Songs of Innocence and of Experience*, ed. Andrew Lincoln (London: The Tate Gallery and the William Blake Trust, 1991) を参照した。

- 2) 'The Little Girl Lost' 'The Little Girl Found' は当初 *Songs of Innocence* に収録され、のちに *Songs of Experience* に移された。この移行の事情については、梅津濟美『ブレイク研究』（八潮出版社、1977）pp. 184-204 に詳細な考察がある。
- 3) Harold Bloom, *Blake's Apocalypse* (New York: Doubleday & Company, Inc., 1963), p. 39, および D.G.Gillham, *Blake's Contrary States* (Cambridge: Cambridge University Press, 1966), p. 147 参照。
- 4) ここで扱われているのは、時代や文化の枠を越えた普遍的な事象である。今いる場所に居心地の悪さを感じているものにとって、「現状」は常に“the desert wild”でしかない。このような遣り場の無い不満と鬱屈が、新興宗教の教祖や革命児などの「パラダイムを創造する」人々を生むのである。中井久夫『治療文化論』（岩波書店、1990）参照。Lyca をつくりだした語り手（預言者）やブレイクは、そういった人々の一人である。
- 5) 土居光知「Blake の Lyca Poems」『英文学研究』第9巻（1929），pp 210-21 参照。
- 6) イザヤ書第11章第6-9節。
- 7) 創世記第2章第19-20節。
- 8) Blake, *The Marriage of Heaven and Hell*, p. 45.
- 9) Zachary Leader は *Reading Blake's Songs* (Boston, London and Henley: Routledge & Kegan Paul Ltd., 1981), p. 39 及び p. 186 において、少女の衣を脱がせる獣に、Lyca の “sexual initiation” をみようとしているが、本稿の主旨は、副題で示された詩集全体の方向性を意識しながら部分としての詩を読むことにあるので、フロイド理論を適用した作品分析は行わない。
- 10) Blake, *The Marriage of Heaven and Hell*, p. 39.
- 11) Blake, *Annotations to the Works of Sir Joshua Reynolds*, p. 641.
- 12) 産業革命期におけるイギリスの社会的弱者の日常生活については George M. Trevelyan, *English Social History* (1942; rpt. London: Penguin Books Ltd., 1986), J.F.C. Harrison, *The Common People* (Kent:

Croom Helm Ltd., 1984)、荒井政治ほか『産業革命を生きた人びと』(有斐閣、1981) および角山栄『産業革命と民衆』(河出書房新社、1975) 参照。宰相ピットの専制政治については John Holland Rose, *The Life of William Pitt* (1911; rpt. London: G. Bell and Sons, Ltd., 1934) 参照。

- 13) 梅津濟美氏は「勝利者の哲学」というエッセイのなかで、次のようにいっている。「勝利者の哲学というか、勝利者の論理というか、そういうものではどうにもならない文学があるものだ。ブレイクの文学もそういう文学であった。」梅津濟美『ブレイクを語る』(八潮出版社、1980) 参照。また、社会学者H・ベッカーの逸脱とラベリングに関する言明も極めて示唆に富んでいる。「人が逸脱者というラベルを貼られるのは、逸脱行為のゆえにというより、社会的マジョリティによって定められた同調・逸脱に関するルールが恣意的に適用されたためである。」H・ベッカー『アウトサイダーズ』村上直之訳(新泉社、1978) 参照。